

「ハレ」と「ケ」の福祉論—岡村重夫「民俗としての福祉」概念の可能性

立教大学コミュニティ福祉学部福祉学科・助教

岡田 哲郎

1. 研究の目的

本研究は、地域固有の歴史、風土、文化に根差す生活者相互が育む「共同体」や「地域社会」を土台に位置付けた福祉理論の構築を目指している。これは近年の「グローバリゼーション」の動きに対し、日常生活を通じて向きあおうとする人々にとってのひとつの拠り所となる研究を志向してのものである。同時にまた、この研究の眼差しは、今進行中の現実と「社会福祉」の乖離状況に向けられる。すなわち、私達を「個」に分解し、「経済成長」と弱肉強食の渦へと巻きこみ、人と自然、人と人との密なる関係を断ち切っていくあり様や、強者が弱者を収奪・破壊していくあり様に対し、近年の「社会福祉」はこの構造を所与のものとし、自らの領域を拡大してきた。そして、その領域に従属させる形で「共同体」や「地域社会」を巻き込みながら現実との乖離を深めていき、今その福祉は瓦解の時を迎えようとしている。本研究は、いわばそうした「ハレ」の福祉を否定するのではなく、「地域社会」で生きあう生活者の立場からの「ケ」の福祉を再認識することで、その視座から「ハレ」の福祉ないし「グローバリゼーション」を止揚するための認識基盤を作ろうとする試みである。「グローバリズムとローカリズムの接合」が今年度の日本地域福祉学会のテーマともなっていることから、本研究助成における成果が、そうした議論の先鞭として今後寄与するものと期待される。

本研究全体の構成としては、第Ⅰ部（導入編）で、一面的な「開発」が地域社会の日常に及ぼす「葛藤状況」をみつつ、その深部に胎動する「グローバリゼーション」の論理・構造について考察し、その根が孤立や格差等、他のあらゆる現代的な生活課題と地下水脈のように結びついている現実の整理を試みた。続く第Ⅱ部（理論編）では、第Ⅰ部の現実に対峙しうる理論枠組みとして、主に、岡村重夫の「民俗としての福祉」概念に注目している。そして、第Ⅲ部（実践編）において、第Ⅰ部の現実を乗り越えるための知恵が、第Ⅱ部の理論枠組みを基に各地から導き出される（フィールドワークは山鹿市、美瑛町、水俣市、高島町、下北半島の5カ所を重点地とした）。本報告では、第Ⅰ部と第Ⅲ部をつなぐ重要な部分として、主に第Ⅱ部の成果を中心に報告したい。

2. 研究の内容

標題にあげた「民俗としての福祉」は、(財)日本生命済生会社会事業局発行の『地域福祉』通巻121号(1976)に掲載された岡村重夫の論稿、「福祉と風土——民俗としての福祉こそ基底」の文中で展開される概念である。本研究では、「民俗としての福祉」概念にみられる視座が、岡村の一連の仕事にどのように貫徹されてきたのか、あるいは変化してきた

のかについて分析するため、『社会福祉学総論（1956）』等の主要著作を軸に、その他重要と思われる論文・エッセイを参照する形で、岡村の著作を全体関連的に捉える文献研究を行った。

岡村重夫は、社会福祉固有の視点・立場を論じた学者であり、社会福祉学及び地域福祉の理論的先達として知られている。これまでは、その「近代的社会福祉」を前提とした「社会関係の主体的側面の論理」が注目されてきたが、地域社会や地域共同体そのものを主体とする福祉（あるいはそれを掘り崩す構造までを視野に含めた福祉）を展望した岡村の側面は必ずしも十分に評価されてこなかった。「ハレ」の福祉と「ケ」の福祉の狭間で葛藤し、最終的には1983年の『社会福祉原論』において「法律による社会福祉」と「自発的社会福祉」の「批判的協力関係」という弁証法的図式に結実した。その葛藤の軌跡を、当時の時代背景とともに解きほぐした。

3. 研究の成果

以上の岡村の考えを基にすると、地域社会の発展を下支えする風土、そのなかで育まれた生活者の論理、それら「基底部分」を掘り崩し、分解させる可能性のある「外来の上部構造」には、生活者の見解を鋭く対置する必要がある。たとえそれが、土地に利益をもたらす「社会福祉」や「外来文化」であろうと、私たちにはそれを地域社会の発展に向けて換骨奪胎する土台と行為が必要であり、まさしくその「基底部分（土台）」の認識を与え、「生活者の論理（行為）」の方向づけをなすものが、本研究のいう「民俗としての福祉（ハレの上部構造を換骨奪胎するケの福祉）」である。

4. 今後の展開

上記で検討してきた岡村の理論枠組みは、「地域社会」を具体的に捉える段にあっては不向きであるため、基本的な理念や視点としては採用しながらも、第Ⅲ部のフィールドワークでは、より実践的な視点・枠組みを、その時々調査目的に応じて使い分けている。

また、本研究助成によって、第Ⅰ部・第Ⅱ部の基本的考察と必要なデータ・資料の入手、及び、第Ⅲ部の整理に必要なデータ・資料の収集を、重点的にとり行うことができた。今年度1年をかけ、これら各部を精緻にまとめていく作業を着々と行っていきたい。